

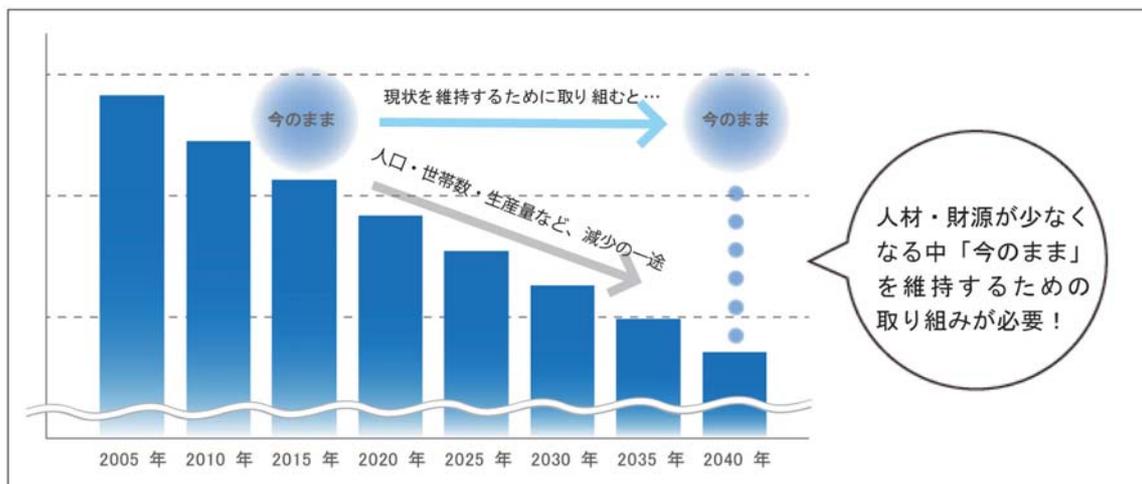
これからを見据えたまちづくり ～ 東彼杵町 ～

はじめに

長崎県内市町で2番目に人口が少ない東彼杵町は、民間研究機関「日本創成会議」が発表した「消滅可能性都市」*の県内リストに、新上五島町、五島市、小値賀町、対馬市、平戸市に次ぐ6番目の自治体として掲載されている。

こうした深刻な人口減少に立ち向かうため、町は2014年度に策定した第5次総合計画で、“10年後も『今のままでいい』といえるまちへ”を基本理念として掲げ、将来も『今のままでいい』と自信をもって言える持続的なまちづくりを行うことを示した。

第5次東彼杵町総合計画の基本理念



「第5次東彼杵町総合計画」より

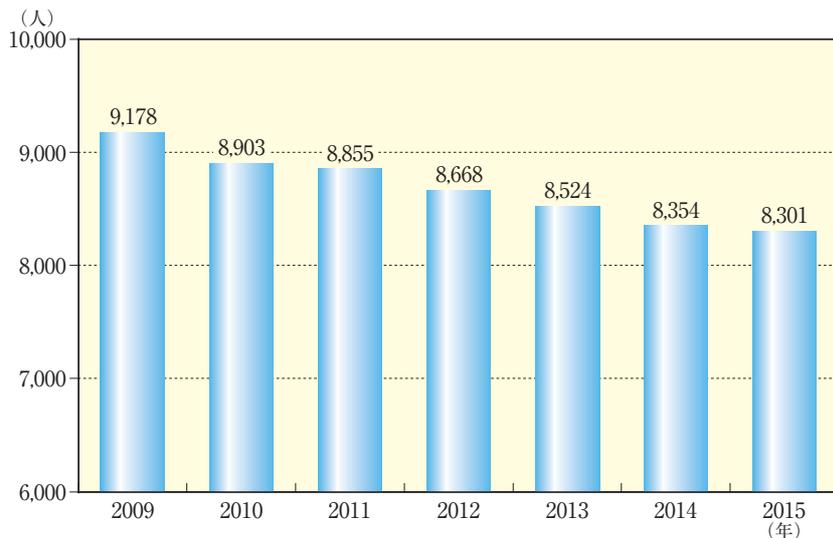
このようななか、町では近年県外の自治体で導入されるようになってきた、集落維持のための新たな手法「T型集落点検」にこのほど着手した。本稿では、県内自治体では初めてとなるこの取り組みを採り上げてみたい。

*民間研究機関「日本創成会議」（座長・増田寛也元総務相）の人口減少問題検討分科会が2014年5月に発表。2010年の国勢調査をもとに試算した結果、同年から2040年までの30年間で20～39歳の女性の人口が5割以上減少することが予測される自治体を指す。

I. 東彼杵町の人口

東彼杵町の人口は、2010年に9千人を割り込み、2015年には8,300人まで減少しており（図表1）、高齢化率は32.9%（2016年9月現在）に達している。

図表1 東彼杵町の人口（各年10月1日）



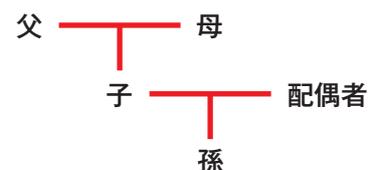
※資料：総務省統計局「国勢調査報告」（2010、15年）、
県統計課「異動人口集計表」（2009年、2011年～14年）

II. T型集落点検

1. 「T型集落点検」とは

「T型集落点検」とは、熊本大学名誉教授の徳野貞雄氏が提唱している地域や集落維持の手法である。わが国における多くの地域や集落が「人口減」や「世帯減」、「高齢化の進行」といった非常に厳しい環境に晒されているなか、地域や集落の維持・存続を「人」の問題と捉え、家族や集落が現在どのような状況にあるのかなど、域内の人の動向を把握して、家や集落の担い手となる可能性を探りながら当該地域の将来像を描き、それに対して浮かび上がってきた諸課題に対する施策を考えるというもの。

T型集落点検の「T型」というのは、父親－母親を水平に書き、その下に子ども、その子どもが結婚していれば同じ方法で記入していくと、その形がアルファベットの「T」を連続させていく形に似ていることに由来する。



※「T型集落点検」のイメージ

2. 「T型集落点検」の進め方

T型集落点検は次のように進めていく

- ①地域や集落の住民が、数軒単位の互助組織（葬式組など）に分かれて、それぞれの家に誰が何人住んでいるのか、続柄と年齢、職業の三属性を自ら調べて集落マップに書き込む。
- ②域外に出て行った子供や孫の年齢とその行先、現在居住している先での家族構成、および職業を調べ、可能であれば実家との行き来の頻度とその内容、帰郷の意思の有無の確認を行う。
- ③最後に、それぞれの家が10年後どうなっているのかの予測を行う。

3. 「T型集落点検」のポイント

人口が減少している地域にとって最も必要な情報は、総人口や高齢化率といった抽象的なものよりも、“現在どのような人によって当該地域が形成されているのか”である。各家の具体的人的構成を把握し、住民の暮らしのあり方や将来像を描くことで、行政による当該地区に対する施策立案等も効果的なものとなる。

この手法は、集落維持においてよく言われる「地域住民の半数以上が高齢者なので、自治活動の維持が困難である」などといった、地域の住民だけではもはや集落が維持できない状況（「限界集落」と称されている）に対して、現在居住している人たちだけでなく、域外にいる子供や孫なども準住民として地域や集落の将来を決める対象とみなし、家族全体の力をもって集落の将来図を描き、支えていくという考え方に基づく。この点において、他人である都市住民に依存することになる“農漁村交流プログラムの実施などによる地域活性化”とは根本的に異なる。

Ⅲ. 東彼杵町におけるT型集落点検の取組み

町では、第5次総合計画の策定を受けて、地域を持続させるために住民目線でまちの将来を描くこの「T型集落点検」を行った。

1. 点検地域の選定

点検の実施場所は、山間部や住宅地区など地域の特徴ごとに選出された、山間部（林業）の「遠目」、中山間部（農業・お茶）の「中尾」、同じく中山間部（農業・米）の「飯盛」、旧漁師町（漁業）の「西宿」、平野（住宅地）の「金谷」の5地区である。

東彼杵町位置図



※資料：2015町勢要覧・東彼杵町全図より

また、当該5地区の人口とその高齢化率は、それぞれ【図表2】の通り。

図表2 東彼杵町T型集落点検対象地区の概要一覧

地区名	遠目	中尾	飯盛	西宿	金谷
人口	52人	100人	70人	129人	162人
高齢化率	50.0%	26.5%	44.3%	44.2%	36.4%
地域の特徴	山間部	中山間部	中山間部	旧漁師町	住宅地

※東彼杵町まちづくり課より聴取作成

2. 点検スケジュール

昨年（2015年）12月上旬に、まず本点検の提唱者である徳野名誉教授を招いて東彼杵町職員への研修会を開催した。その後、5地区の住民向けにも同氏の講演会を開催したうえで、今年（2016年）の1月下旬～3月上旬にかけて第1回目の集落点検を行った。

今回の点検では、まず個々の集落の人的資源の実態を具体的に把握するために、住民の生活構造と地域を再認識するワークショップの開催とアンケート調査を行った。

3. 点検内容

（1）住民の生活構造と地域意識の把握

まず始めに、対象地区の住民を集めて、常会を単位とした作業グループに分かれてもらい、そのグループごとに集落の地図とそこに住む世帯構成を記入する。また、その際には他出した（町を離れた）家族についても記入することで、集落世帯の全体構成の把握に努める。なお、世帯構成の調査にあたっては、次のようにみていく。



集落点検のようす（写真提供：東彼杵町）

①同居中

②近接別居（同一集落内）

③直近他出（同一自治体）

《東彼杵町内》

④近距離他出（車で1時間以内、生活協同圏）

《大村市、諫早市、佐世保市、川棚町、波佐見町、佐賀県嬉野町、長崎市、佐賀市、佐賀県武雄市》

⑤中距離他出（車で2時間、セーフティネット圏）

《福岡県福岡市・久留米市、佐賀県》

⑥遠距離他出

《東京、大阪など》

（2）アンケート調査

①集落内の18～79歳の居住者全員が個人別に記入。

②調査項目：フェイスシート（回答者の個人情報に関する質問項目）、交通手段、地域に対する意識、団体参加、近所付き合い、まちづくりについてなど

4. 点検結果

「3. 点検内容」の(1)から得た結果の概要は次の通り(図表3)。

図表3 東彼杵町T型集落点検対象地区の点検結果一覧

地区名	遠目	中尾	飯盛	西宿	金谷
点検結果	<ul style="list-style-type: none"> 最も町の奥地に位置する限界集落。 まだ孤立はしておらず、近距離他出子がサポート。 近距離他出子の2地域居住者あり。 	<ul style="list-style-type: none"> 中山間地に位置するが、お茶の生産加工により嫁の確保など、比較的安定的な農家世帯を形成。 20~59歳までに男25人、女19人がおり、集落の中核世代・世帯を保持。 	<ul style="list-style-type: none"> 世帯での高齢化が進行。 40~50歳代の近距離他出子が男13人、女15人おり、地域をサポート。 例：長女(川棚町)、長男(福岡・Uターン予定)、次女(大村市)など。 	<ul style="list-style-type: none"> 海岸沿いの旧漁師町 高齢化が進行しているものの、50代と60代に男23人、女21人がいる。 空き家があるが、次世代のUターン者の自立も見受けられる。 	<ul style="list-style-type: none"> 町役場そばの住宅地 60~75歳のいわゆる“プレミアム世代”が多数在住。 20歳代に人口流失が見受けられるが、30~40歳代にU・Iターンが発生。

※東彼杵町まちづくり課の資料より当研究所にて作成

また、(2)のアンケート結果については詳細集計中であるが、配布した調査票345票のうち、有効回答が323票にのぼり、回答率は93.6%に達した。

IV. 東彼杵町全体について

徳野名誉教授は、5地区における1回目のT型集落点検結果から、東彼杵町全体について次のようなことがいえると指摘している。

- (1) 人口流出は続いているものの、年齢構成は正常
- (2) 流出人口の多くが近距離居住者
- (3) 集落ごとに多様な形態と課題がみられる
- (4) 独居高齢者には必ず近距離にサポーターがいる



指導を行う徳野名誉教授(写真提供:東彼杵町)

これらのことから、町の第5次総合計画の基本理念には十分妥当性があるとの判断であり、町の人口減を前提とした地域モデルの構築には、かなり可能性があると言っている。

V. 今後の取組み

東彼杵町では、各地域・集落の10年後の姿を話し合う2回目の点検を2016年9月に、また、各地域・集落の具体的課題とその対策について話し合う3回目の点検を今年の12月、もしくは来年(2017年)の1月に行う予定である。

また、「T型集落点検」を、町の第5次総合計画にある“将来も『今のままでいい』まちづくり”を実体化するための作業であると捉えて、今後も自信をもって進めていくとしており、その過程で、

- (1) 世帯の担い手や介護、都市計画や防災などに対するプロジェクトの立ち上げ
 - (2) 人材育成のための研修の実施や、プログラムの作成
- などの具体的な作業を行い、課題の抽出に取り組んでいく。

おわりに

これまで地方は、“人間”および“人材”という最も重要な資源を都市部に供給・放出し続けてきた。その結果、深刻な人口減少に晒されており、今後地方に残った人々は、人口・世帯が減少した集落で生活していかなければならない。

今回紹介した東彼杵町における地域と集落維持の動きは、最近よく財政基盤が弱い自治体で見受けられる「コンパクトシティ構想」に逆行するまちづくりの形であるが、同町まちづくり課では「町の財産である田畑や茶畑が広がり海も望むことができる景観の維持・保全と、これに魅せられて移住を希望する人々の期待に応えるためにも、今後も町内各地の集落を維持していきたい」としている。この町の取組みは、人が減り続けているためにこのままでは限界集落になってしまうと考えている長崎県内の他地域の参考ともなろう。東彼杵町における「T型集落点検」の今後の展開を引き続き見守っていきたい。

(杉本 士郎)